

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程3年	大西寿明 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	新妻昭彦 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	1930年代のイギリス文学と第一次世界大戦		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程3年	大西寿明	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

1920年代のモダニズムとその後の30年代を第一次世界大戦と第二次世界大戦に挟まれた時期である戦間期として統合、再構成しなおし、その時期に書かれた文学、芸術の再認識への試みが近年において盛んになされるようになってきている。その中で本研究は、Evelyn WaughとGraham Greeneの1930年代の作品に焦点が当てられる。これらの作品は手法としてのモダニズムの影響を受けつつ、意識的に世界恐慌以降の経済の破綻、政治の混乱を作品内に描き込んでいる。その点で両作家は戦間期を捉える上で重要であると考えられる。第一次世界大戦から世界恐慌後の政治経済的混乱といった時代背景を念頭に置き、ウォーとグリーン作品を再考することを目標とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[Evelyn Waugh] [Graham Greene] [戦間期]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2011年度の研究は2010年度より行っていた戦間期におけるイギリス小説研究を引き続き行うことが主眼であったが、研究発表、論文執筆の点から振り返ると一定の成果があったと言える。主な業績としては、まず、2011年5月22日に北九州市立大学において開催された日本英文学会第83回全国大会での研究発表が挙げられる。「帝国から個人へ—*A Handful of Dust*における30年代のナショナリズム」というタイトルで行われた口頭発表では、Evelyn Waughの1934年の作品である*A Handful of Dust*をとり上げた。Jed Estyは、30年代の後期モダニズムの中に拡張的な帝国主義モダニズムから内向きの国民文化への変容が描かれていることを指摘し、後期モダニズムの内に「国家的復興」への願望が胚胎していることを明らかにしている。その上でエスティは「遅れてきた世代」に属するEvelyn Waugh(1903-66)の*A Handful of Dust* (1934)を、帝国の没落と国家の没落を重ね合わせる作品群に分類し、後期モダニズム以後の作品に位置づけることで、「国家的復興」を願う後期モダニズムとの差異化を図る。主人公 Tony Last の運命がイギリス文化に残存する帝国主義の遺産に囚われた者の運命であるならば、たしかにその運命はエスティが言うように「国家的復興」であるよりもむしろ「消え去りつつあるイングリッシュネス」(222)を印づけるものであるだろう。また David Gervais は、ウォーのイギリス小説における貢献を「悲嘆と哀愁を湛えたイングランド」をコミカルに描いて見せたこととしながら、*A Handful of Dust*においてこれまでの放埒な世界観からウォーが守られるべき「伝統」に目を向けていることを指摘し(159)、この作品をウォーの転換点となる作品に位置づける。しかしジャーベスが、諷刺作家であるウォーとイングリッシュネスとの関係を定義するためには、「イングリッシュネスとは言いえないもの」を指摘する重要性を強調するように(175-76)、ウォーの作品におけるイングリッシュネスとしての伝統は明確に描かれるわけではない。こうしたウォーの描く失われていくイングリッシュネスに対する研究は、主人公 Tony Last とそのカントリー・ハウスである Hetton Abbey が、大都会ロンドンに食い潰されるといったパストラル的対立と価値観に焦点を当ててきた従来 of 批評に基づいていると言える。しかし、*A Handful of Dust* のヘットンに表象される戦前の世界観は、失われていくことが嘆かれるべき価値を有しているのだろうか。むしろ過去から連綿と続く伝統的、帝国主義的イングランドらしさが危機に瀕した過渡的な時間の中で、失われていくイングランドらしさとしての「伝統」そのものにこそウォーの諷刺が向けられているのではないか。それゆえに本発表では、1930年代の歴史的事象に目を向けることにより、伝統的イングランドらしさを装うヘットン・アビーの描写のうちいかに経済恐慌を迎えたロンドンの荒廃が内在しているかを指摘し、伝統に対する諷刺的眼差しから *A Handful of Dust* におけるウォーの諷刺作家としての時代意識を考察した。この発表は加筆修正され、『第83回大会 Proceedings』に掲載された。

次に挙げられるのは、2011年12月17日に立教大学において開催された2011年度立教大学英米文学会での研究発表である。「*England Made Me*におけるGraham Greeneと資本主義」というタイトルで行った口頭発表ではウォーと同時代の作家であるグリーン of 1935年の作品 *England Made Me* に焦点が当てられ、ウォーのときと同様に、1930年代の世界恐慌以降の政治経済的混乱を念頭に置きつつ、作品を再解釈した。この発表では、資本主義経済に対する批判的な読解を惹起させる社会主義者グリーンと、自身のこれまでの人生を振り返る中で、*England Made Me* の読解から政治経済的問題を切り離し、この作品を改めて姉弟間の近親相姦的な愛の物語に回収しようとするストーリーテラーとしてのグリーンの矛盾に着目し、これを明らかにするために、*England Made Me* における資本主義の表象を論じていくことになったが、まず、これまでに先行研究が問題としてこなかった鉄道という装置に目を向けた。

研究成果の概要 つづき

この装置をグリーンがしばしば好んで用いていることは周知の事実であるが、本作品においてグリーンが描く鉄道の表象は資本主義社会と密接に結びついて用いられ、作品世界の基調となっている。そのことをまず確認し、利潤と愛を交換可能にしてしまう資本主義にこそグリーンが批判的眼差しが向けられていることを検証した。そして最終的に、生産様式である資本主義がいかに個人の思考や生き方に影響し、人間関係を空疎化してしまうものとしてグリーンによって描かれているかを考察することを目標とした。

これら二つの発表によって、モダニズム以降の作家であるイーヴリン・ウォーとグレアム・グリーンを読む新しい視点を獲得できたことが今年度の大きな収穫と言えるであろう。

このほかには、2012年3月17日に学習院大学において行われた日本キプリング協会での発表がある。「帝国主義イデオロギーと個人的友愛の間で—*A Passage to India* 再考」というタイトルで口頭発表が行われた。帝国主義の観点から様々に論じられてきた『インドへの道』という作品が、マスードとの個人的な“friendship”に捧げられていることは注意を要する問題である。Gregory W. Bredbeck が P. N. Furbank を引きながら、マスードこそ、フォースターがホモセクシュアルな欲望を感じた最初の相手であると述べているように(31)、『インドへの道』というテキストは、初めから男同士の友愛とホモセクシュアルな欲望の境界線を問題とした作品であったとも考えられるからである。追悼文の中で二人の友愛について語ることを「時期も場所もふさわしくない」(TCD 299)と述べるフォースターのマスードへの感情は、ふさわしい時期と場所を必要とせねばならないプライベートなものとして、『インドへの道』のアジズとフィールディングの友愛関係が成立するための時空間の否定、“No, not yet,”と“‘No, not there.’”(PI 362)をおそらく意識的に反復している。この反復はフィールディング／アジズの関係性をフォースター／マスードの関係性と並べて考える必要性を促すだろう。それゆえに、フォースターのインド体験を基にして描かれた『インドへの道』という長編は、帝国主義イデオロギーと個人主義という対立においてのみ読まれるのではなく、帝国主義イデオロギーとフォースターのセクシュアリティの緊張関係から読まなければならない。その緊張関係の中で初めて、フォースターが他者と結ぼうとした「フレンドシップ」の意味が問題となる。よって、本発表ではフォースターがいかにヒンドゥー教を脱政治的な思想体系として解釈していたかを確認し、『インドへの道』においてヒンドゥー教と彼のホモセクシュアリティの繋がりを明らかにした。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①
「戦間期文学としての *Decline and Fall* の位置—ヴォーティシズムの影響を中心に」『第 83 回大会 Proceedings』、178-80、2011.

「帝国から個人へ—*A Handful of Dust* における 30 年代のナショナリズム」『第 83 回大会 Proceedings』、69-71、2011.

④
日本英文学会第 83 回全国大会・2011 年 5 月 22 日・北九州市立大学・「帝国から個人へ—*A Handful of Dust* における 30 年代のナショナリズム」

2011 年度立教大学英米文学会・2011 年 12 月 17 日・立教大学・「*England Made Me* における Graham Greene と資本主義」

日本キプリング協会・2012 年 3 月 17 日・学習院大学・「帝国主義イデオロギーと個人的友愛の間で—*A Passage to India* 再考」